

ぼくの町にくじらがきた

文／ヤング 写真／バーンスタイン



訳／くまがい いくえ



ぼくの町に ^{まち} ノバムゼモ

ジム=ヤング 文

ダン=バーンス

^{くま かい い く え}
熊谷 伊久栄 訳



WHEN THE WHALE CAME TO MY TOWN

by Jim Young

© 1974 Jim Young & Dan Bernstein

Originally published by Alfred A. Knopf

Japanese edition published by KAISEI-SHA Co., Ltd 1978
by arrangement with Japan Uni Agency





ぼくには、わすれられないことがある。生きていくかぎり、ぜったいにわすれない。それは、くじらが、ぼくの町にやってきたときのことだ。

ぼくは、コッドみさきのいちばん先にある、プロビンスタウンという町にすんでいる。イギリスからはるばる海をわたってきた清教徒（質素な生活、清らかな信仰を主張したイギリスのキリスト教の一派。その一部が一七世紀初めに、アメリカへ移住した。）が、はじめてアメリカの土をふんだところだ。

ぼくの家（いえ）のうらがわは、かいがんで、その先は大西洋だ。ぼくは、毎日（まいにち）かいがんをとって学校（がっこう）へいく。そして、学校（こう）のかえりには、さんばしのほうを見て、とうさんの船（ふね）がかえっているかどうか、たしかめるんだ。



とうさんは、毎朝早く、すずき、さば、ひらめ、まぐろなどをとり
に海へでる。ぼくも、大きくなったら、とうさんみたいなりようしに
なりたいとおもう。

ぼくのおじいさんも、りようしだった。夏には、えびを、冬には、た
らをとっていた。そして、ひいおじいさんは、くじらをとっていた。
けれども、ぼくは、ぜったいにくじらをとりにたくない。

百年まえまでは、この町のりようしは、ひとりのこらずくじらを
とっていた。みんな大きなはん船（ほんの船）にのってでかけ、三年もかえつ
てこないことがあったそうだ。ひいおじいさんもそのひとりだった。

おじいさんの船も、はん船だった。でも、とうさんのは、エンジン
つきのそこびきあみぎよ船（大きなあみで海の底を引く、魚をとる船）だ。ほはついていない。

とうさんの船の上から、くじらが、みなとの外でおよいでいるのを、

見たことがある。すぐちかくによってもこわがらず、まるで、ぼくたちと友だちになりたがっているようだった。

くじらは、大きくてつよい。しかも、りこうなどうぶつだ。空気をすって生きているけれど、ふかい海の中でもせいかつできるんだ。くじらは、海にすむどうぶつの中では、はやくおよげるし、長生きするどうぶつだ。

くじらは、大きなぞうみだ。たいようや月のように、いだいなんだ。

だから、ぼくは、ぜったいにくじらをとりにたくない。

その日は、ま冬の、さむくて風をつよい日だった。ぼくは、学校へいくとちゆうだった。かいがんには、だれもいなかった。空は、くろ

いくもおおわれ、しお(海の水)がひきはじめていた。

そのときだ。ぼくが、はいいろをした大きなものを見つけたのは。

はんぶんは、すなはまにうちあげられ、あとのはんぶんは、まだ水の中なかだった。それは、じっとしてうごかず、バスよりも大きおおかった。

ぼくは見たとたんみに、それがなんであるか、すぐわかった。

かいがんには、ぼくとそいつがいはい、だれもいなかった。かもめさえいなかった。ひきしおのときは、よくかもめがとんでいる。それに、朝あさはたいてい、犬いぬがさんぽをしている。でもその朝あさは、ぼくとそいつだけだった。

そいつは大きおおくて、みうごきひとつしなかった。ぼくは、そいつがなんであるかわかっていた。けれども、こわかった。

今までにこのかいがんいまで、こんなに大きおおなものを見たことはなかつ

た。きしにたどりついたもののうちで、いちばん大きいだろう。

ぼくは、そいつとふたりきりだった。だから、こわかったんだ。

でもぼくは、少しずつちかづいてみた。見ると、それには、かにかついていなかった。しんで、すなはまにうちあげられたどうぶつには、たいてい、小さいかにかくつついているのに。

それに、そいつは、ちゃんとせを上にし、はらを下にしてよこたわっていた。しんで、きしにうちよせられた魚は、たいてい、あおむけになっている。それなのに、そいつは、ちゃんとはらを下にしていた。しかも、スースーという音がきこえる。

そいつは、くじらだった。生きていくじらだった。ぼくには、こきゅうの音がきこえたし、目がうごくのも見えた。からだは、まだぬれていて、ぎんいろにかがやいていた。





くじらにはうろこがない。くじらは魚さかなではなく、ほにゆうるい（肺呼吸し、母乳）で子を育てる最も高等な動物。（にぞくしている。）だから、魚さかなのようなうろこはない。そして、とくべつ大きなおをもっているんだ。

おが、水みずの中なかでゆっくりうごいたので、ぼくが、くじらのまわりをぐるっとまわったとき、くつがぬれてしまった。しおがひきはじめているから、もうすぐ、からだぜんたいが、水みずの中なかからあらわれるはずだ。でも、からだがおもいので、くじらは、すなの中なかに少しうずもれていた。

みちしおになれば、くじらは、およいでおきのほうにいけるかもしれない。でも、それまでには、まだずいぶんじかんがある。

くじらは、すなの中なかでずっとうごけないでいた。そのうち、すっかりしおがひいて、足あしをぬらさなくても、くじらのまわりを、ひとまわ

りできるようになった。

くじらには、小さな目があった。くろいひとみだ。それがときどき、まばたきをする。でも、ぼくは、一どに一つの目しか、見ることができなかった。もう一つの目は、頭のむこうがわにあって、ずっとはなれているからだ。

くじらには、大きな口と大きな頭もあった。ぼくがしているどうぶつの中で、いちばん大きな頭だ。すいぎゆうよりも、ぞうよりも大きい。

頭の上にあるはなのあなから、ゆげがでていた。くじらは、このあなから水をふきだして、いきをする。けれども、このくじらは、ゆげをだしていた。

ぼくは、こきゆうの音に耳をかたむけた。どうして、ここにいろの

だろう。まいごになったのだろうか。あさせまで、なにかをおいけてきたのだろうか。わかいのかな、それともしをとっているのかな。おすかな、めすかな。ここで子どもをうむつもりなのだろうか。海がめはきしにাগり、すなの中なかにたまごをうむ。けれども、くじらは、たまごをうまないはずだ。

しがちかづくと、きしにাগってくるくじらもいると、町まちの人ひとたちが話はなしているのをきいたことがある。

それなら、このくじらは、しんでしまうのだろうか。

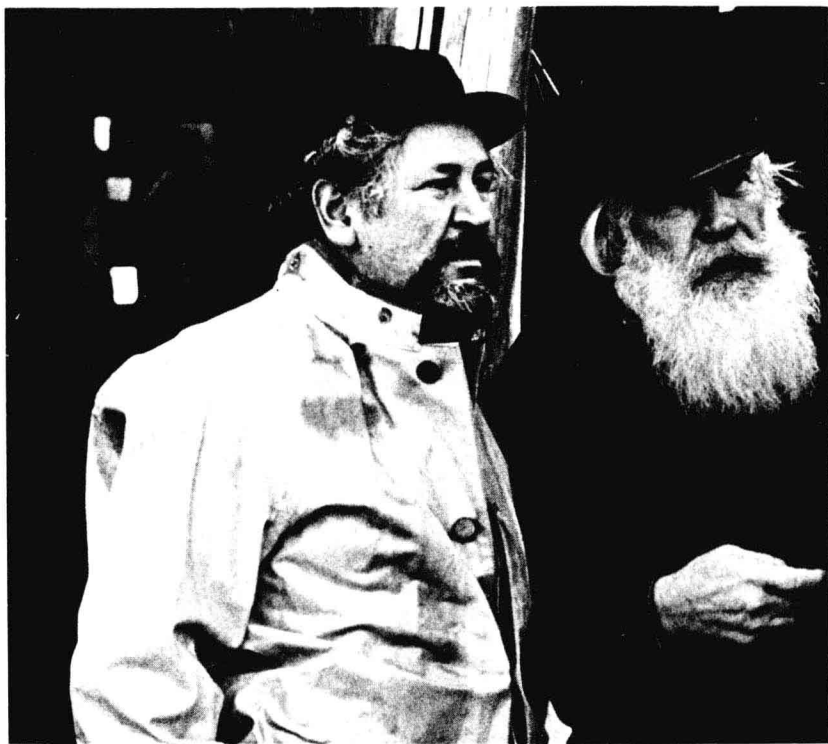
その日ひ、ぼくは学校がっこうをやすんだ。そして、一日いちにちじゅうくじらのそばにいた。

まず家いえにかえって、くじらのことをみんなに話はなした。でも家いえでは、

ぼくのいうことを、だれもしんじてくれなかった。ずっとまえ、さきゆうのところで、くまを見たと、かあさんにうそをついたからだ。それから町へ行って、町の人たちにも話した。けれども、ぼくは、ぼくがみつけたくじらのことを、町の人たちに話さなければよかったとおもった。

はじめに、町のじいさんたちがやってきた。犬もたくさんきて、くじらのまわりをほえながら走りまわった。少しはなれたところで、じいさんたちは、おしゃべりをはじめた。

としよりは、ものしりだ。この町がまだくじらとりでさかんだったころのことをおぼえている。としをとっているので、もう、りょうにはでられない。でもそのかわりに、おしゃべりをするんだ。じいさんたちは、犬がだいすきだけれど、それとおなじくらい、おしゃべりが



すきなようだ。

とうさんは、この町では、
老人、子ども、そして犬が、
いちばんたいせつにされてい
るといつていた。

犬はほえ、じいさんたちは
しゃべりつづけた。

じいさんたちは、むかし話
の中でてくるくじらの話を
した。聖書の中には、ヨナと
いうよげんしゃがくじらのほ